

開催日時 2012年9月29日(土) 13:15~17:30
 開催場所 関東学院大学関内メディアセンター
 参加人数 64名

第I部 記念講演

「東海・東南海・南海巨大地震 どこまでわかったか」

～南海トラフ海底探査最前線研究者の視点～

木下正高博士(独立行政法人 海洋研究開発機構 高知コア研究所 所長)



地震とは断層の固着している部分が急激にずれること。海で起こる地震が大きい。100～200年に1度マグニチュード8級の巨大地震が起きている。

まとめ：断層のかたちと「固着域」について

- ・沈み込むプレートと陸側プレートの境界は巨大な逆断層である
- ・プレート運動は年間4.5cm、これが100年で解消されると断層上のずれは4.5m

・断層が地震を起こす「能力」をもつのは、ある条件が満たされた場合のようだ。その場所を「固着域」と呼ぶ。

この「固着域」が地震の巣でマグニチュード8であると固着域は100km×100kmにも及ぶ。マグニチュード7では10km程度に狭い。

地球深部探査船「ちきゅう」で実際に得られた写真、データを示されての講演は知らないことが一杯で興味深く引き込まれました。

最後に今話題の内閣府が発表した南海トラフの巨大地震モデルの高知県黒潮町の津波の高さ34mの話にも触れ、神奈川県では最大9.2m(鎌倉)最少3.5mであるとのこと。必ずまた起きる。覚悟が必要です。世代を超えて伝えるべきだ。

第II部 記念講演

「東日本大震災の液状化災害」

～何が起こったのか、これから何を考えるべきなのか～

規矩大義博士(関東学院大学工学部教授)



液状化とは地盤が軟らかくなること。人命を奪うような被害はない。大きな地震により、土粒子のかみあわせが外れることが原因である。その地域が過去の地盤で埋め立てられた場所、下水管の埋め戻し、ため池を埋め立てた地域とかが場合がある。被害のあった地域となかった地域の違いは歴史だけでは説明できないこともある。

想定外とは無知の発生現象である。常日頃から知識を持つておくことが大事とのこと。

第三部 事例発表

「開発にともなう地すべりの危険性」

後藤史朗氏 (元横浜高校物理教諭)



六浦・柳谷戸の傾斜地の開発の中で、特に盛り土予定地の谷の部分に着目し、崩落の危険性を説明された。短時間に住民の立場で理論的な意見を書類等にまとめられ、感心させられた。地形図での説明、その場所が地形作られた歴史的な地すべりの事実等興味深いものであった。

第四部 パネルディスカッション

パネリスト 木下正高博士(独立行政法人 海洋研究開発機構 高知コア研究所 所長)

規矩大義博士 (関東学院大学工学部教授)

安田八十五博士 (関東学院大学経済学部教授)

後藤史朗氏 (元横浜高校物理教諭)

モデレーター 岡田清 (ハイテック建築研究所 主宰)



講演

「第三次関東大震災のリスク分析と政策シミュレーション」
安田八十五博士

パネルディスカッションに先立って安田博士の講演。その中で原子力空母が横須賀母港とした時原発があるのと同じような危険があるとのことに非常に驚いた。



パネルディスカッションではI、II部の講演者への質問に回答をいただいたり、一緒に問題提起をしていただきおもしろい意見交換ができた。

主な質問は

- ・ 三浦活断層への影響
- ・ 造成工事について
- ・ 埋立地の石油コンビナートについて
- ・ 富士山等の火山の爆発について

むずかしい質問もあったように思うが、各先生方のわかりやすい回答に今後の防災への取り組みに期待できると確信した。科学の領域だけでなく歴史を知ることの重要性を先生方に教えていただき、難しいテーマに興味を持たた。



閉会挨拶 宮澤廣幸